

沖縄八重山文化研究会会報

第 225 号

発行 沖縄・八重山文化研究会
事務局 沖縄県立芸術大学付属
研究所 波照間永吉研究室
那覇市首里金城町三一六
Tel. 〇九八・八八二・五〇四三



高雄にある橋仔頭糖廠の「五分車」。甘藷を運ぶための軽便鉄道。日本統治時代に盛んとなった糖業は、沖縄県出身者の就業先ともなった。



中村 春菜

本発表では、現在手がけている修士論文「戦後台湾における沖縄県出身者の引揚げ

戦後台湾における沖縄県出身者の引揚げの様相―証言を中心に―

第二二五回沖縄・八重山文化研究会（会長三木健）は、二〇一一年七月二四日、県立芸大付属研究所内で開かれ、中村春菜氏が「戦後台湾における沖縄県出身者の引揚げの様相―証言を中心に―」と題して発表した。
中村氏は一九八五年、与那原町生まれ。琉球大学在学中、台湾大学歴史学科で一年間、交換留学生として過ごし、現在は琉球大学人文社会科学研究所琉球アジア専攻に在学中。またニュージールランド・ヴィクトリア大学の日本語学科にて日本語会話講師も担当。今後の活躍が期待される若手研究者である。

の様相―証言を中心に―の構想を発表した。発表内容は論文の構成（各章の概論）、研究の背景・動機・目的、研究方法、そしてオーラル・ヒストリーの役割とその意義についてである。

研究の背景は、一九四五年度の日本の敗戦に伴い、旧植民地（台湾、朝鮮、サハリン、南洋諸島、満州など）、占領地（中国大陸、フィリピン、シンガポール、インドシナ半島、マレー半島、南太平洋地域など）、ソ連軍占領下の千島列島など、広範囲に及ぶ地域から強制送還されてきた人々（軍人・軍属及び民間人を含める）が六六〇万人以上いたとされるところから始まる。その中でも、特に沖縄県出身者と深い繋がりがある地域は台湾である。日本の台湾領有直後から多くの沖縄県出身者が台湾へ移住、出稼ぎ、進学等で渡台しており、「外地国勢調査」によると一九四〇年の時点でその数は約一万五〇〇人にのぼる。また戦況が悪化してくる一九四四（昭和一九）年七月七日、東条内閣によって、奄美大島、徳之島、沖縄本島、宮古島、石垣島に居住する老婦

<p>女子を本土へ八万人、台湾へ二万人、七月中に疎開させることが決定された。さらに戦後南洋群島からの引揚げで一時的に台湾に滞留していた沖縄県出身者も含めると、敗戦直後の在沖縄県出身者の総数は、約三万人にもものぼるとされている。しかしながら、戦後の混乱等もあり、台湾引揚げ者の実態は関連資料（中華民国が作成した『政府接收台湾資料彙編』と米軍側の資料「琉球列島の軍政 一九四五―一九五〇」及び「沖縄戦後初期占領資料」等）をわずかに残すのみで、明らかにされているとは言い難い。</p> <p>台湾引揚げは、沖縄の戦後史の一端でもあるが未だに空白の部分が多く、その空白部分を埋めるためには、台湾引揚げを体験した人々に語ってもらいその歴史を明らかにしていく必要がある。戦後六十余年を経た今、高齢のため年々減少していく台湾引揚げ体験者にインタビューを行い、台湾引揚げの全体像をまとめていくことが急務とされる。</p> <p>修士論文の章立ては、序章から始まり三章仕立て、そして終章を予定している。</p> <p>第一章【沖縄県出身者台湾引揚げの時代的背景】先述した公的史資料を用いながら、沖縄県出身者の台湾引揚げがどのように計画され、どのように実行されていったのかなどの全体像を把握していく。第一節</p>	<p>では、実質沖縄県出身者の引揚げを管理・統制した中華民国が作成した『政府接收台湾資料彙編』第三章「日僑の移送與徵用」に収録された二六一件の引揚げ関連公文書を中心に分析を行う。第二節では、引揚げ者の受け入れ先である米軍政府による引揚げ関連の資料「琉球列島の軍政 一九四五―一九五〇」及び「沖縄戦後初期占領資料」を中心に分析をしていく。</p> <p>第二章【台湾引揚げにおける沖縄県出身者の役割】沖縄県出身者の引揚げの実態を把握するのに忘れてならないのが、同じ沖縄県出身者でありながら、引揚げ業務に終始携わった「沖縄県同郷会連合会」と「琉球官兵」の存在である。第一節で取り扱う「沖縄県同郷会連合会」とは、敗戦後各地で逼迫した生活を送る沖縄県出身者（特に強制疎開者）を救済するために組織された沖縄県出身者で結成された扶助組織のことである。敗戦後、台湾各地にいる貧窮した沖縄県出身者を救うべく、中華民国政府や軍政府とかけあい窮状を訴え、また引揚げ業務にも後述する琉球官兵らと積極的に関わっていた。沖縄県出身者の引揚げの様相を語る上で重要な組織であった。第二節で取り扱う予定の「琉球官兵」とは「戦争中、台湾各地の部隊に所属して活躍した沖縄籍軍人軍属のこと」である。彼等は「日僑」の引揚げ業務にも携わり、「琉僑」の</p>	<p>引揚げにも最後まで従事した。本章においても、収集した証言を組み込んでいくことが必要とされるが、これまでに筆者が収集した証言で触れられることがほとんど無かったため、今後証言を収集する際の課題である。</p> <p>第三章【沖縄県出身者の引揚げ方法】本章では、第一章の引揚げに関する各公的な資料の分析、第二章での引揚げ業務の過程を踏まえた上で、実際どのような形態で沖縄県出身者の引揚げが行われたのかを証言を多用しながら時系列に沿って論じていく。第一節で本土經由引揚げと沖縄への引揚げの実態について検討し、次節から順にヤミ船引揚げ、町村船引揚げ、沖縄本島への引揚げ、病院船引揚げの実態を証言資料により説明していく。</p> <p>最後に、本研究では「文字史料」と「口述資料（口述史料）」を組み合わせて書くという手法をとる。どちらも、「『自らの言語で何事かを報告し、何事かに関する情報を伝える役割』を主とする『発言資料』」という立場に立脚し、戦後処理等で混沌とした時代背景に翻弄された沖縄県出身者の歴史を、沖縄戦後史の空白の一端を明らかにしていくのが本研究の最大の目的である。残り約半年、ある程度まとまった形で修士論文として執筆していきたい。</p>
---	--	--

文化短信

台湾系住民が土地公祭

石垣島に住む台湾系の住民が「土地公」と呼ばれる道教の神に祈りをささげる「土地公祭」が九月、名蔵御嶽で行われた。土地公祭は、八重山に住む台湾系の人々が集まる重要な行事のひとつ。旧八月十五日に合わせて行われ、鳥肉と魚、豚肉からなる「三牲」と呼ばれる供え物や果物や菓子などを供え、独特の細長い線香をささげたり、紙銭を燃やしたりする儀式などを行った。会場は無病息災や商売繁盛を祈願する人たちにぎわった。

星と惑星の国際会議開催

国際研究会「星と惑星の形成二〇一一」がこのほど、新川のビーチホテルサンシャインで開催された。海外からの研究者など四人が参加、四日間の日程で最新の研究成果の報告や意見交換が行われた。石垣島での星と惑星に関する国際会議は三度目。今回の研究会は星と惑星の形成について、電波や光、赤外線など、最新の観測的研究成果についても議論する。

古式ゆかしく伝統行事

国指定の重要無形民俗文化財で五〇〇年以上の伝統を誇る西表島祖納と干立の「節祭（シチ）」のユークイ（世乞い）がこのほど催され、ミリックやアンガー行列やオホホなどさまざまな芸能が奉納された。節祭は一年の豊作を感謝し、来年の五穀豊穡と住民の無病息災を祈願する行事で、一九九一年に国の重要無形民俗文化財に指定され、今年で二〇年目を迎える。

祖納公民館の節祭は「スリズの儀式」で三人の旗手に守り刀が託されたあと、一番旗を先頭に集落内を練り歩き、前泊海岸に到着。浜では、旗頭を先頭にピョーシ、ミリック、アンガー行列が静かに入場。奉納舞踊などが次々に繰り広げられた。干立公民館の節祭は、前の浜でヤフヌテイや船漕ぎが行われたあと、干立御嶽境内で狂言や巻き踊り、棒術、ミリック行列、獅子舞などが次々と奉納された。

中でも干立地区の独特のオホホはひょうきんな面をかぶり「オホホー」と奇妙な声を上げ、ユニークなしぐさに観客らが盛り上がった。会場には石垣からやってきた郷友会員や大勢の観光客が詰めかけた。また小浜島でも、住民総出で結願祭が行われ、島独特の多彩な芸能が奉納された。

結願祭は一年間の豊作に感謝し、改めて来年の五穀豊穡と無病息災を願うもの。独特の芸能が披露される結願祭は旧盆行事、種子取祭とともに国の重要無形民俗文化財として二〇〇七年に指定を受けている。嘉保根御嶽で盛大に開かれたこの日の結願祭は、北集落のミルク、南集落の福祿寿をそれぞれ先頭にしたり住民らが嘉保根御嶽に会し、それぞれ座マール、太鼓や獅子、棒術を次々と奉納した。続いて特設舞台で領集落が交互に舞踊や狂言を披露した。

尖閣関係資料収集へ

石垣市史 新たに小委員会設置

石垣市市史編集委員会（三木健委員長）は八月に開いた編集委員会で、戦後開拓移民編、大浜村（町）合併関係資料編、尖閣関係資料収集を担当する三つの小委員会を設置した。

これまで提案されていたが具体的な取り組みがなかった戦後開拓移民編は、今回、小委員会を設置することで具体化させる。大浜村合併関係資料編は、聞き取り調査も含めて記録し、二〇一四年の合併五〇周年の刊行を目指す。尖閣諸島については年表作成の裏付けとなる歴史的、学術的な史料を収集していくことになる。

新刊紹介

日誌風に時系列で事件を紹介

田島信洋著

『石垣島唐人墓の研究』

― 翻弄された琉球の人々 ―

一八五二年に石垣島を舞台に繰り広げられた「唐人墓事件」は、その発端となった「ロバート・バウン号事件」と合わせて、幾多の研究論文や著作が書かれている。著者も以前にこの事件を取り上げ『石垣島唐人墓事件』を上梓している。その後、同書をめぐって、研究者間で論争が行われてきた。

本書はこうした論争を踏まえて、あらためてこの事件を検証するかたちで書かれている。といっても堅い論文調のものではなく、事件の発端から終息までを日誌風に、時系列で叙述したものである。元になった史料は、主に『琉球王国評定所文書』第六巻と『島津斉彬文書』下巻一で、それに大英博物館所蔵の英文関連資料や、研究者の論文などである。口語体の分かりやすい文体に直して綴られている。その日誌の合間に、著者の読み方、見方が挟まれている。事件とは、一八五二年二月に中国の厦門

からアメリカ東部の金山に働きに行く労働者四〇〇人余を乗せた米国の商船ロバート・バウン号が、八重山沖を航行中、労働者に対する待遇をめぐって暴動が起き、石垣島に上陸した唐人と島の人や王府役人と送還をめぐり五八九日も島を巻き込んだ事件である。三八〇人いた唐人ら上陸者は、滞在中に疫病や自殺などで相次いで死亡、わずかに一七二人が島を去るが、さらに途中で海賊に襲われ、一二五人が帰還するというもの。石垣島を舞台に、琉球王府、中国、イギリス、アメリカを巻き込んだ国際的な事件であった。

本書では、一八五二年三月二〇日の島への上陸から、一八五四年の六月七日の事後処理まで、滞在中の様子や、王府とのやり取りなどが事細かに紹介されている。そこに浮かびあがってくるのは、唐人に対する王府側の詳細にわたる気配りである。著者はそれを何事も「唐ご都合向き」を気にしていた王府側の「ミニ国家」としての施策故と見ているが、そのしわ寄せが疲弊した島民にのしかかった、としている。また唐人の中には、広東語が話せたり、ちやんとした文書の書ける人がいて、島を去る際に「感謝状」を書いたり、渡航時の「移民契約書」を見ても、いわゆる「苦力」とは違い、出稼ぎ移民であるのと見方をしている。

最後に著者は、現在改修工事が進められている富崎原の「唐人墓」の碑文について批判している。「唐人墓」の記念碑がはじめて建立されたのは一九七一年だが、この時の碑文が事件の内容を全く反映することなく、一般的な「華人公墓」の慰霊文であることが一〇年後に問題となり、一九八二年に書き換えられ、現在の碑文に至った経緯がある。

著者は碑文について、「この碑文によると、中国人労働者は厦門で集められ、アメリカに送られたという。果たして『集められ』『送られた』のか。『多年雨が降らず人民が飢饉に及んでいた』からではなかったか。(中略)琉球王府と蔵元は『人道的』に対応し、中国側の被害を少なくするよう極力配慮したという。極力配慮したのは、はたして人道上の理由からだったのか。『唐ご都合向き』ではなかったか。島民は『深く同情』したという。それで『密かに食糧などを運び給した』のか。山野に逃走中の唐人のもとへ食料をほんとうに『運んだ』のか。そんな物的・精神的な余裕が島民にあったのか」などの疑問を投げかけている。(郁朋社、B6判、二四三頁、一五〇〇円+税)

*11月の例会 11月20日(日)予定
講師・演題は追ってお知らせします。